

思想史分野に見る疑似研究

——「井田メソッド」は学問性に無価値である

杉 田 聡

二〇一九年時点での前がき

数年前、医学・生理学分野で疑似研究が社会問題になった（いわゆるSTAP細胞問題）。思想史分野では、同種の疑似研究が一回っているにもかかわらず、それがほとんど問題化されずに流通するという、奇怪な現象が起きている。

問われるべき疑似研究とは、井田進也や平山洋（客観性を旨とする研究者にとって敬称は不要である）の真筆者判定法のことである。これを平山は「井田メソッド」と呼ぶが、それ自体問題をはらむばかりか、自ら固有の検証も行うことなくこれを都合よく使っている研究者がいる現状を見て、私は、これが方法的に誤った疑似研究であることを、『福沢諭吉朝鮮・中国・台湾論集——「国権拡張」「脱亜」の果て』（明石書店、二〇一〇年）の「解説」において、詳論した。

だがそれからすでに十年弱がたったが、相も変わらずに、自ら何の検証もせずにこれを安易に使う研究者が絶えない現実がある。彼らの態度は、知的誠実さに欠けていると言わざるをえない。また、彼らがどこまで自覚しているか不明だが、この現実には、多方面に広がる歴史修正主義を、驚くべきことだが学問分野から強める働きをしている。「井田メソッド」自体、学問的に無価値であることが最大の問題だが、歴史修正主義の強化という点からも、私はその安易な利用をうれえる。

それゆえ、『福沢諭吉 朝鮮・中国・台湾論集』での私の論証が広く共有されることを願って、明石書店の了承の下に、これをインターネット上に公表する。

以下、本文として登録したのは、①『福沢諭吉 朝鮮・中国・台湾論集』に付した解説「福沢諭吉と朝鮮・中国・台湾」のうち「一 『時事新報』論説は誰の思想を表わしているか——本書を福沢の論集とするゆえん」、②その「後記」（付記）であり、そして、③『論集』自体の「あとがき」である（初刷りにあった誤植等を修正した第二刷による）。ちなみに、①において、同書に収録した福沢論説に言及しており、また出典を略号で示している。それゆえ、右三編の後に、同書の目次および文献一覧をも掲載した。

以上を通じ、「井田メソッド」が学問の名に値する研究なのかどうかを、研究者自身が判断せんとする気運が生まれることを、期待する。

（二〇一九年三月八日）